

書店には今、宗教・心理学・自己啓発関係の本があふれている。重厚な哲学書も根強く読まれている。ミシェル・フーコーはその一人である。彼は、フランス知性の最高峰コレージュ・ド・フランスの教授としてサルトル以降の現代思想をリードしてきた。狭い枠組みにとらわれず幅広く表現活動を進めてきたが、惜しくも一九八四年に五十七歳で亡くなった。

### ライフワーク……

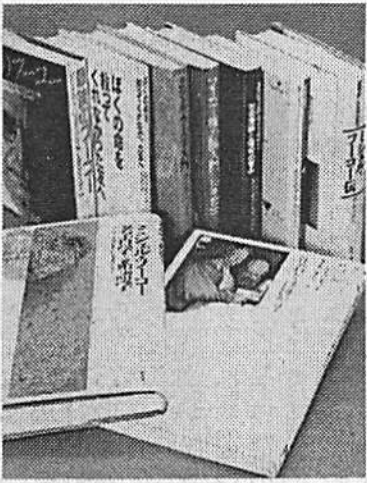
フーコーは、今自分たちが生きている現在とは何であるのか、と問い続けた。

日々の暮らしの中で何気なく感じる違和感や矛盾を歴史的に掘り下げて的確につかむことが、彼のライフワークであった。「正常」を基準を立てて「逸脱」や「狂気」を排除してきた近代史を分析した「狂気の歴史」。学校、病院、監獄、兵舎といった近代的な施設の問題点を指摘した「監獄の誕生」。性は抑圧されているという前提に根本的な批判を加え、自己と他者との新たな関係を模索した「性の歴史」(以上、新潮社)。いずれも現実的な社

## 本をめぐる フーコーを

# 混迷の時代に合う哲学

## スキャンダラスな人生



フーコーの生涯と哲学の本

会問題と深くかかわり、しかも安易な処方せんを提供するのではなく本質的な問題を鋭く指摘している。哲学者といえは厳格な人物像を思い浮かべるが、同性愛者だったフーコーの生き方にはスキャンダラスな香りさえあり、それがまた

年間刊行され続けている。ト著、山本学訳「ミシェル

・フーコー入門」(新潮社、二、五七五円)が、権力と知、国家と自由の問題に焦点を当ててフーコーの思想の全容を分かりやすく解説している最適。エリボン著、田村淑訳「ミシェル・フーコー伝」(新潮社、三、五〇〇円)は、知られざるフーコーの生きざまや交友関係などが描かれており、読み物としても面白い。綿密な取材活動とインタビューの成果が十分に発揮されて生きたフーコー像を描いている。

クル出版部・二、〇〇〇円)が権力の抑圧からの解放という従来の権力観ではなく、日々の暮らしの中に潜むパワーの在り方を明らかにしており群を抜いている。そして最新刊のクレメールマリエッティ著、桑田禮彰ほか訳「ミシェル・フーコー 考古学と系譜学」(新評論・三、八〇〇円)は哲学史からフーコーの仕事を綿密に位置づけており、言葉や知と社会的な制約の編成の在り方との関係を描いている。

またフーコーの親友だったギベール著、佐宗鈴夫訳「ほくの命を救ってくれなかつた友へ」(集英社、一、六〇〇円)の自伝的小説には、同性愛者としての生々しいフーコーが登場する。文学に関心のある人は「ミシェル・フーコー文学論集 ①④」(哲学書房・各、一、五〇〇円)が勧められる。

自己と他者、性の問題についてはバーナウアーほか編、佐幸信ほか訳「最後のフーコー」(三交社・二、三〇〇円)が刺激的である。三〇〇円が刺激的である。絶筆となった「性の歴史」の書かれなかった部分に肉薄し、同時に詳細な文献目録を掲載して便利。

権力の問題を探るには、山本哲士著「フーコー権力論入門」(日本エディタース文化科学高等研究院)